

随想

直観とひらめき

真摯に物事に向き合うことこそ必須

(株)PPQC研究所 加藤 宏光

直感が働くことがある。とくに、専門的な分野で多い。私は二ワトリ専門の獣医師として、農場巡回に際して、当然であるが鶏舎に入る。

大学を離れて、フィールドに接した頃の採卵養鶏農場では、平均羽数が二、〇〇〇〜三、五〇〇羽程度であり、それで五人家族がゆっくり食べて行けた。飼養密度は一八〜三二羽/坪で、基本オーブン鶏舎であった。現在の二、〇〇〇〜三、〇〇〇以上/坪とは比べようもない経営形態であったことがうかがえるよう。

大規模化した採卵養鶏会社のシステムは、そのほとんどがウインドウレス鶏舎でダブルデッキ、トリプルデッキで八段、ときには一二段にケージが積み上

げてある。圧倒的なシステム鶏舎に入つて、いきなり違和感が感性を刺激することがある。

《何かが違う》と、それこそ何か第六感に訴えるのである。そこで、時間をかけて何が何を訴えているのかをチェックする。結果、僅かな異常から大きな問題の前駆状態を見つめる。私の日常である。

池谷裕二著の『脳には妙なクセがある』という書物を読んだ(新潮文庫)。この書物には、自身で感じ取つてはいないが(万人の)脳が自律的に感じるさまざまな傾向が解説してある。中でも興味深いテーマとして、

●脳は妙に自分が好き、●脳は妙に信用する、●脳は妙に運任せ、●脳は妙に知つたかぶる、●脳は妙にブランドにこだわる…それ

らの中に●脳は妙に直観する」という項があった。記述を少し紹介する。

ヒトは意識的に記憶するだけでなく、無意識にも学習し成長するが、無意識の場合では本人に成長したという実感がないうため、なかなか気付かない。

(池谷氏の)個人的な印象では、意識的学習より無意識の学習の方が、ヒトの人格や成長に与える影響がはるかに大きいように感じる。芸術・料理のセンス、デザインや企画の考案等の能力は無意識の学習のたまものである。

【ひらめきと直感の違いとは?】普段の生活では両者を同じように感じているかもしれないが、脳の研究では両者を区別している。両社の《ふと思いつく》と

めきを『知的な推論』と直感を『動物的な勘』と呼んでいる。ちなみに、直観力は年齢と共に強くなる。経験がモノをいうからである。

【直感がアテにならない、というレアケース】直感や勘は脳が実際に持つ能力である、直感の諸特徴として①判断が早い、②ほぼ正しい、③経験によつて鍛えられる等の点が挙げられる。へ中略へ一般的に平凡な情報は情報として機能しない。話題に上ること自体が選ばれた話題であるということに興味する。しかし、平凡なことこそ真に大切な事柄が潜んでいるかもしれない。へ中略へ一人の割合で感染する、致死性の高い病気があったとする。ある製薬会社が『信頼性九九%』という高い検出力の検査法を開発した。もしあなたがこの病気に感染していたら、九九%の検出率で陽性になる。今、あなたがこの検査を受けたところ『陽性』と出てしまった。多くの人はこの結果から「自分は感染しているのはほぼ確実」と直感するであろう。しかし、その直感は間違いない!

問題は、一人に一人しか感染しない、という点を普通感で感じない。例として一〇〇万人を母数としてみる。真の陽性者は二〇〇人である。また、1%については陰性でも陽性という結果が出る。一〇〇万マイナス一〇〇が陰性の総数で、この九九万九千九百〇〇人のうち、陰性でも陽性という結果を得る人は九九九九九人いる。あなたの陽性結果は、この九九九九九人に入つているかもしれないのである。一〇〇万人を九九%の信頼度で検査すると、九九九人十九、九九九人が陽性となり、そのうち真の感染者は九九九人しかいない、という事実を直感では得にくいのである(この内容は、私自身も解説をじっくり読むまで直感で理解し切れなかった)。

直感、理屈を抜きにして道筋を見極めるのに有効であることは、私も日常経験している。しかし、今挙げたような事実を踏まえると、直感で得た(正しいと思つた)道筋を、確かに正しいと確認する作業が必要であることを実感した。浅見帆帆子氏の書になる『出逢う力』という本を書店で見つけた。

ご本人は東京都生まれで、青山学院大を卒業後ロンドンでインテリアデザインを学び、帰国後執筆活動を始めた才媛である。

読み進んだ印象では、陽性の『ややおカルトっぽい語り口』と『自らの経験からくるのであろう決め付け』が、必ずしも私の肌合うものではないが、内容に共感するところも少なくない。とくにここで取り上げたいのは『メディアやネットからの情報を入れすぎると直感は鈍る』という項である。

浅見氏曰く、直観力が鈍るとき、というのもある。予定に秒殺され、雑多な情報があふれかえり、頭と心に余裕がないときである。精神レベルの高い人たちは、新聞、雑誌、テレビ、インターネット等の情報源に翻弄されず、(傍線は私)自分に入ってくるものを上手に制御している。本心に必要な情報は、たくさんモノやヒトに触れているから入ってくるのではない。また、特定のヒトだけから来るものでもない。ヒトを含めた周りにあるものが、必要な情報を伝える。

いう点では状況は似ている。しかし、その後の様子が異なる。『ひらめき』は思い付いた後にその答えの理由を言語化できる。思い付いた時点では気付かなかったが、改めて考えるところの答えの理由がわかる。その理由はうんぬん、というように本人が理解できる。

一方、『直感』には本人にも理由がわからないが確信できる場合を指す。感じた理由を「ただ何となく…」という根拠は明確でないあいまいな感覚で、その答えの正しさが漠然と確信できるのが直観である。そしてそれが意外に正しい点が単なる『ヤマ勘』や『でたらめ』と決定的に異なる。

この書物の著者・池谷氏はひらめきには波動があり、情報にも波動があるため、望ましくない情報が雑多に入ってくる、知らない間にそのエネルギーの影響を受けてしまう。へ中略へ悲惨な何かを知ったときにやみくもに同情するのは、その「悲惨な事件」にエネルギーを注いでいることになり、自分の中にそれと同質のモノを増やしてしまうことになる。へ後略へ

彼女のいわんとするエネルギーの本体は、著者にはよくわからない。しかし、ドライなようでも、自分に直接かかわらない世の中での悲惨で可哀想な出来事に心を注ぎすぎても、世の中は変わらないことは同感である。また、彼女のいう「波動」というモノも説明できないものの、何かしら感じるころはある。

これらの《何かしら感じるもの》が直感の姿であろうか!? 職業的な直感、大事に育ててゆくべきであり、「自身の直感・ひらめきが育つためには、真摯に物事に向き合うことこそ必須である」と思われる。